

Title	新宿中村屋・聖学院・明治女学校 : 相馬黒光『黙移』から迎える人々の交流
Author(s)	黒木, 章
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume16 : 66-84
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2818
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

新宿中村屋・聖学院・明治女学校

——相馬黒光「黙移」から辿る人々の交流——

黒木 章

一九九九年の大晦日の出来事を書くことから始めよう。それが厳肅で緊張感のある中にもわたくしの連想を広げてくれる実に豊かな経験だったからである。

*

東京北区中里の高台に近隣の住民をはじめ聖学院の関係者や教会員など二〇〇〇人に近い人々が真夜中前に集まった。これは、教会と二つの学校で三つの十字架を掲げてこの地域をキリスト教の雰囲気溢れる街に作り替えようとする願う滝野川教会と学校法人聖学院とが協力して仕掛けたもので、女子聖学院中高のチャペルで記念礼拝とドイツから招いたサットマリー氏のオルガン・コンサートを行ない、隣接の聖学院中高では新校舎のお披露目を兼ねて、これまた新しく作られた「石川ベルタワー」の鐘（後で述べるように、実はまだ完全に出来上がっていたのではなかった）を鳴らして街全体で第三ミレニアムを迎える「カウントダウンの集い」であった。

日本の言論・思想界に「第三ミレニアム」という言葉を恐らく数年前に持ち込み、最近のはやり言葉になるきっかけを作ったのは、聖学院の理事長でもある滝野川教会の大木英夫牧師であった。この夜の礼拝説教はその大木牧師が担当した。二〇世紀は、科学技術の飛躍的進歩によって人類が未曾有の幸福を実現した反面で世界的な規模の

戦争が繰り返された暗澹たる時代であったとか、この一〇〇年間の人類の欲望追求特に先進工業国のそれが地球環境を破壊してもはや回復不能な危機的状況にあるといったこと、またいまやヒトゲノムの解読を越えて神ならぬ人の手で生命体を操作しようとしていることの不安などは多くの識者が共通して指摘しているのだが、この夜の大木牧師の説教も特に二〇世紀の悲惨な戦争の現実・人間の罪を指摘した。しかし、「戦場に架ける橋」を導人にしたその説教の眼目は「にも拘わらずキリスト者は二〇世紀の一〇〇年を越えて新しいミレニアム・一〇〇〇年へ架かる神の壮大な救済の業を見ることができるのであり、我々は神のこの救済の業に参画すべく恵まれた存在なのだ」という点にあった。満堂を揺るがしたオルガンの響きとこの人ならではのメッセージとが新しい年に向けて踏み出そうとする人々にどれほどの勇気を与えるものであったかは、頬を輝かせて新年の挨拶を交わしつつ暗い寒風の中に散って行く人々の姿に明瞭に表れていた。それがわたくしの心を楽ませたのである。

この夜の出来事の中でもう一つ、「石川ベルタワー」の鐘を鳴らそうとして綱を引いた人の姿にも心を打たれた。彼は寒風に晒されていたはずだが、顔に汗を光らせながら全身を使って綱を引いた。その一生懸命さが、どこかユーモラスでありながら実に深い喜びを表していた。わたくしがそう感じたのは、その鐘を鳴らせるようになった事情について多少知っていたからだろう——近く創立一〇〇周年を迎える聖学院中高は新校舎の建設に合わせてキリスト教学校を象徴する新しいベルタワー作り、それに聖学院中学の初代校長・石川角次郎を記念する名前を付けて「石川ベルタワー」と呼ぶことにした。新校舎の落成式は一九九九年一月の初めに行なわれた。「石川ベルタワー」は、正門をはいって五・六〇メートルのスロープとさらにその先に続くの階段の上、講堂兼礼拝堂の横に高くスッキリした形で建っている。聖学院のシンボルとして誠にふさわしい。だが、実は資金不足のために新校舎落成式の時まで肝心の鐘を取り付けることができなかったのである。もちろん、鐘を鳴らす電動装置も完成していなかつ

た。ところが、大晦日の夜に地域の人々と共に第三ミレニアムを迎えるカウントダウンの集いをやろうという学院本部の計画を聞きつけた卒業生たちが急遽全国を走り回り、長崎のさる所から鐘を借りてきて大晦日直前に取り付けた。それは文字通り間一髪の業であった。だから、この日練習無しのぶつつけ本番の綱引きになったのだ——懸命に綱を引く人の姿がどこかしらユーモラスでありながらも深い喜びを表していたのもうべなるかなである。(因みに、この後卒業生たちは募金を呼びかけて立派な鐘を作り、それを寄贈してベルタワーに取り付けてくれた。)

大晦日には誰でも自分の生き方を点検しまた時間や歴史を意識するのだろう。この夜、わたくしも初代校長の名前を付した真新しいベルタワーから夜空に響き渡る鐘の音を聞きながら、聖学院の一〇〇年、この間に関わった多くの人々、そして日本社会におけるキリスト者たちの伝道の闘い——というようなことを思った。それがまたわたくしを自由な連想に誘って、実に心豊かな経験をするようになったのである。このような思いと連想とは『木下尚江全集』の最終巻を出そうとして教文館が難渋していると聞いて成り行きを案じていたことも関係していたかも知れない。

*

聖学院の学校教会から始まる滝野川教会で洗礼を受けたわたくしにとって木下尚江はいつも気になる存在である。もちろん、『火の柱』『懺悔』など幾つかの代表的な作品は学生時代にも読んでいた。北村透谷の『厭世詩家と女性』によって「大砲をぶちこまれたような」衝撃を受けたという彼の発言も知っており、(後半生には岡田虎二郎の静坐法に親しんで自らそのための道場を滝野川村に作って住んでいたからでもある)尚江の一人息子・正造(足尾鉍毒事件で田中正造と共に戦った尚江——毎日新聞連載の現地報告記事『足尾鉍毒事件』は田中の国会演説と相俟って弁護士らしい仕方では証拠を具体的に示しながら国と国民との問題、資本主義経済活動に潜む悪の問題を別つ

て非常な反響を呼んだものである——は、男の子が生まれたら尊敬する田中の名前をもらって「正造」と名付けることを申し出て許されていた……ただし、やっと恵まれた男の子の誕生は大正二年二月二三日であり「正造」と名付けられたが、田中正造はその前九月四日に死んでいた。）が聖学院を卒業して早稲田に進んだことも知っていた。木下尚江についていつかはきちんとした発言をしなければならぬという義務感のようなものを抱えたまま二〇年間以上も怠けていたのだが、なんと、わたくしが聖学院大学の基礎作りのために馳せ参じてから五年目の一九九二年一月二十九日にその正造が召天し、しかも葬儀が滝野川教会で行なわれたので、わたくしはそれを手伝うことになったのである（彼は死の少し前に大木牧師によって病床洗礼を受けていた）。葬儀には新宿中村屋（早稲田を出てから中村屋に勤め、後半は長く役員をしていた）や早稲田ラグビー（学生時代にラグビーをやり、卒業してもその最後まで強力な支援者であり続けたという）の関係者を初め四〇〇人以上の人々が駆けつけた。葬儀の司式者・大木牧師は日本ではクロムウエル革命研究の第一人者でもある。その時の大木牧師は「日本のクロムウエル」と渾名された尚江のことを（わたくしは故人とのバランスを欠くのではないかと案じたほどに）多く語った。しかしそれが却って参列者に深い感銘を与えた。（因みに、正造の病床洗礼の折にその妻・哲子も洗礼を受けた。正造亡き後も彼女は孫娘・優佳と一緒に滝野川教会の礼拝に出席していた。）

正造の孫娘が聖学院大学に入学した年に（尚江について多くの発言をされていた隅谷三喜男先生がそのころ聖学院の全学教授であったから、先生に多くのことを教えてもらいながらであったが）わたくしは講義に木下尚江を取り上げた。そして——肝心の孫娘はわたくしのクラスに出てくれなかったが——学生たちと一緒に松本を訪ねて旧居跡や墓所、記念館などを見て回り、浅間温泉の——結婚式をあげたばかりの相馬愛蔵と良（後の相馬黒光。特に断らない限り以後は黒光と記す）夫妻が保福寺峠を越えて、松本にはいる前の晩（恐らく明治三〇年三月二五

日)に泊まったという——宿にも泊まってみた。困窮のどん底にあった黒光には実際的な嫁入り道具らしいものは何もなく、叔母・佐々城豊寿が贈ったとされるオルガンや巖本善治が贈ったという勝海舟揮毫の書、また後に萩原守衛(後の碌山。彼には後で触れる)を惹きつけたといわれる長尾奎太郎の絵「亀戸風景」だけであった。それらは先に松本の木下尚江——松本中学では愛蔵たちに尊敬される一年先輩で、愛蔵が東京専門学校(後の早稲田大学)に進んだのも尚江を慕つてのことであった。専門学校を卒業した尚江は、松本のメソジスト教会で洗礼を受け、松本で弁護士をしていた。以前は松本の長野県庁誘致運動や普通選挙運動に関わるなど政治的な活動をして入獄するなどのことがあったが、そのころはこの地方のキリスト者たちと婦人矯風会の看護婦・関山達子などが連携して展開した藝妓置屋設置の反対運動や廃娼運動、禁酒運動などを支援していた——宅に送っておき、黒光は尚江宅で相馬家が用意した衣服に着替え、そこから改めて婚礼の隊列を組んで安曇野に向かう手はずになっていた。だから黒光の母親代わりをつとめて翌日送り出したのは尚江の母である。

また、わたくしは機会あるごとに正造の妻・哲子に木下家から尚江資料を借り出した人のことや保管状態を聞いたり全集の進捗状況を尋ねたりしていた。彼女は全集完結を見届けるのが自分の最後の仕事だというようすで「最終巻に収録すべき大事な資料がどうしても出てこないのよ。また一年延びるわね」と話していた。そのように話した彼女も二〇〇〇年九月二二日に天に逝ってしまった。葬儀は滝野川教会で行なわれ、わたくしも参加した。

滝野川教会——木下正造——木下尚江——新宿中村屋——相馬黒光——明治女学校——石川角次郎——聖学院……この連鎖が実に鮮やかに立ち上がってくる。どこを起点にしてもどんどん連想が広がる。その自由な広がりがわたくしには実に楽しい。

*

わたくしは、相馬黒光の回想『黙移』（平凡社ライブラリー）の記述を手掛かりにしながらとりとめもない連想を記してみようと思う。だが、錯綜することを避けるために予め黒光の生涯について概略を示しておく方がよいだろう。

星良は、明治八（一八七五）年九月、仙台藩士で儒学者・星雄記の孫娘として誕生。母は巳之治、父喜四郎は婿養子であった。巳之治の妹（良の叔母）艶（後の豊寿）は才氣煥発で仙台では評判の女性であったというが、横浜のミス・キダーの学校（後のフェリス女学校）や中村正直の塾で学び日本最初の官立東京女学校の教員になった人である。艶は中村の塾にいたころ同じ塾生で妻子持ちの軍医・伊東友賢（後の佐々城本支）と恋に落ち彼との間に娘・信子をもうける——これが後に国木田独歩との恋愛／破局をめぐって問題になった『或る女』のモデルである——。良が通った東二番丁小学校の近くに教会があったので、良は日曜学校に通い、一二年、一三歳のとき母親と共に押川方義によって洗礼を受けた。没落士族の家で高等科に進むことも困難な状況であったが、押川と彼の一番弟子・島貫兵太夫の世話で宮城女学校に入学。しかし、二五年の斎藤冬や小平小雪らが学校の教育方針異議申し立て事件で退学させられたのを受けて、良も自主退学して上京する。神田の叔母・佐々城豊寿宅に暫くいて横浜のフェリス女学校に入学、さらにフェリスを退学して二八年九月に明治女学校に入学する——この間の世話は押川と島貫がした——。明治女学校卒業直後の三〇年三月二〇日、巖本善治・佐々木豊寿・島貫兵太夫などの立ち会いで相馬愛蔵と牛込弘方町教会（愛蔵はここで洗礼を受けていた）で結婚式をあげた。二人の結婚を取り持ったのは島貫である。富士見軒で開かれた披露宴では青柳有美（後に触れる）が自作の詩「寄ヒボクリーンの泉」を朗読している。黒光は地主相馬家の嫁として安曇野に留まり、三一年五月一日に誕生した長女・俊子（これも後に触れる）や長男・安男を生んで育てながら——相馬家では農業だけでなく愛蔵が取り組む（彼には著書『蠢種製造

論」がある）養蚕業を営んでいたが、黒光が手伝う仕事は殆どなかったという——、また愛蔵がリーダーを務める南安曇基督教青年会や東穂高禁酒会、また義兄・安兵衛らが中心となった井口喜源治の研成義塾の設立などを側面から助けていたが、体調を崩す。三二年一月一日には東大病院で卵巣腫瘍の手術を受ける——このとき、絵の勉強のために既に上京し、巖本善治の世話で火災後に巢鴨庚申塚（明治女学校の初代校長・木村熊二の兄が所有していた土地）に移転していた明治女学校の一角に住んでいた萩原守衛は連日見舞いに来る——。明治三三年の『女学雑誌』第五一〇号に投稿した「田舎の花嫁」に「嫁御僚の心中誰か憐れと思召さずや之れ空想にあらざ妄像にあらざ小説にあらざ否な現に目前に於て演じつつある活ける小説なりトラジデーなるを如何せん……」とあり、また第五〇四、五〇六号の「夜叉鏡」に「余り我儘勝手なることを為す男に、一度分娩の苦痛を味はしめ、其洪面を笑つてやり度心地……」などとあるところをみると信州の農村ではまったく異質な嫁・黒光には相当のストレスがあつたようだ。（因みに、「夜叉鏡」を読んだ巖本が彼女に自重を促す意味で良に「黒光」という名をつけたのだという。）三四年には叔母・佐々城豊寿や姉・蓮が死んで心と体を病む。このころから東京に戻ることを切実に考え、愛蔵の協力で三四年一二月、東大前のパン店「中村屋」を買い取った。愛蔵は農繁期や春と秋の養蚕業のために信州に帰郷して年間の半分以上は留守にするから、彼女がその女主人になる（『女学雑誌』第五一六号には彼女の「麵麩屋開店の記」が載っている）。三七年二月、次女・千香子誕生。シュークリームからヒントを得たクリームパンやクリウムワッフルの開発で大繁盛した中村屋は四〇年一二月に新宿南口に移転。四一年三月萩原守衛（祿山）が帰国して新宿西口にアトリエを作り、連日訪ねて来る。萩原は黒光に恋心を抱いて苦悩する。四二年中村屋を新宿東口の現在地に移転——ここには萩原・中村ツネ・柳啓助・中村悌二郎などが集まり、後に明治・大正時代の芸術家サロンとして有名な新宿中村屋になる——。四三年四月二〇日、萩原守衛が中村屋の茶の間で血を吐き二

二日に死ぬ。四五年、心身共に弱くなって伏し勝ちの黒光を木下尚江が見舞いに来て岡田式靜坐法を勧める（約一年後にこれに参加するようになる）。大正三年三月、長女・俊子をモデルにして中村ツネが描いた「少女裸像」が美術展に出され、驚いた女子聖学院院长・バーサ・クロソンが抗議。大正四年、中村ツネが俊子との結婚を迫り黒光と不和になる。この一二月、インドの独立運動家ボースを中村屋に置く。七年七月、俊子がボースと結婚。一四年三月、俊子が二六歳で死ぬ。昭和十一年、黒光は「黙移」を出版。二九年二月、愛蔵が死ぬ。三〇年三月一日、黒光死ぬ。

*

さて、水雨の降る明治二九年二月五日の早暁、麴町区下六番町六番地——以前は島田三郎邸であった——の明治女学校は教員宿舍の階下を貸していたパン屋の出火によって殆ど焼失した。当時高等科の学生で寄宿生であった星良（後の相馬黒光）は、同室生の秦冬（後の島崎藤村夫人）などとともに舎監呉くみの叫び声で庭に飛び出したという。もちろん、この時の校長・巖本善治もそうした。ただ、巖本は、三人の子供たちを抱えて飛び出す。四人目の子を妊娠中でしかも肺結核に冒されて重篤な病状にあった妻・嘉志子（『小公女』その他の翻訳で知られ若松賤子とそのペンネーム。以後若松賤子と記す）を猛火の中から救い出したのは消防士である。巖本は、ぐったりしている妻を背負って、「子供たちを隣の有島さんに！」と叫びながら避難先に向かって走る。女学生たちは巖本の妹の嫁ぎ先である木村駿吉邸に、巖本の子供たちは隣の有島邸に一時避難した後、賤子が収容された家を集められた。怪我人もなかったのだが、賤子は文字通り瀕死の状態で運び込まれた。このときのようなすは「黙移」にも書かれている。しかし、「賤子夫人の容態がその夜のうちに悪化し、まもなく立ち退き先のわびしい一室で、先生（巖本）の看護もむなしく絶命されたのであります」とだけあって、賤子の避難先が何処であったのかは書かれていない。

実は、それが石川角次郎の家であった。石川の家は明治女学校から西へ約一〇〇メートルほどの下二番町にあった。(黒光は『黙移』で青柳有美——後に触れる——のことは多く語っているが、石川にはまったく言及していない。また、多くの伝記作者、例えば山口玲子も『とくと我を見たまえ 若松賤子の生涯』で「学習院教授、聖學院校長石川角次郎宅へ難を避けた」と書いているように、このときの石川は学習院教授であったとしているが、誤りである。)彼はこのとき明治女学校の英語教員であったのだ。

この間の事情を分かりやすくするために、秋山操の『基督教会(ディサイプルス)史』から摘記しつつわたくしの連想を導く小さなことも加えよう。石川角次郎は慶応三(一八六七)年、栃木県足利の生まれ。法学士になることを目指して明治一五年に上京、高木信吉宅に下宿して高木から英語を学び、明治一七年からは東京大学予備門に入学して三年間勉強した——この三年間は夏目漱石と一緒にであったはずだが、両者ともお互いに名前を記す資料を残していない。二人の関心事の違いが両者を没交渉にさせたのだろうか——。しかし、高木や植村正久の感化を受けて予備門入学以前に植村によつて洗礼を受けていた石川は神学を志し始めていたから東大への進学を拒絶して——加藤弘之東大総理のキリスト教撲滅論に憤激していたからだとも言われている——同志社に進もうとしていたが周囲の反対で断念し、高木や植村の助言を得て明治二〇年三月に米國留学に立出する。そしてサンフランシスコのユニバーシテイ・カレッジでは英文学やラテン語、ギリシヤ語を学び、続くオハイオ州立大学では英文学とドイツ語を学んでM Aを取得する。この間キリスト教の理論と実際、聖書と教会政治、洗礼の教理などの研究を続けていた彼は、ディサイプルス派のW・K・アズビルによつて改めて全浸礼——ディサイプルス派が重視する伝統的な洗礼の形式——を受けてその派の教会員になる。アズビルがミス・スコットやマッケレブ夫妻を伴つて伝道のために来日したとき石川も彼等と一緒に帰ってきた。それが明治二五年四月である。

留学から帰った石川の願いは、もちろんキリスト教の伝道である。しかし、当時の日本は、前年初めに起こった内村鑑三の一高不敬事件が典型的に示すように、所謂日本回帰・反動の時代であり伝道には極めて苛酷な状況にあった。石川は、麻布第一連隊下士集会所に週二回の聖書講義に出かけるとか、青柳有美と共にガイ博士を助けて関口教会の設立と運営に協力するなどの伝道活動に尽力する一方で東京専門学校や国民英学会そして明治女学校で教えていたのである（青山なをの『明治女学校の研究』によると石川が明治女学校で教えたのは二七年——月日は不詳——から二九年五月までである）。既に高等科を卒業していた富田八重（二六年の『女学雑誌』第三四九号には校長・巖本の考え方を色濃く反映した彼女の卒業論文「女子高等教育」が掲載されている）と恐らく二九年五月に結婚。その後二九年五月から三〇年八月まで岡山の県立中学校で教えてまた東京に戻る。三〇年九月からは学習院教授になっていたのだが、ガイ博士の聖学院神学校創立に協力するために三六年三月に学習院教授の栄職を辞し、四月から聖学院神学校の教授になったのであり、三九年九月に聖学院中学校が設立されるとその校長を兼ねることになったのである。

元に戻ろう。石川角次郎の家に運び込まれた若松賤子の病状は誠に深刻でも動かせる状態ではなかった。そして二月一〇日の朝、彼女が「お墓には賤子とだけ彫ってください。人に話すことは何もありません。もし、人が聞いたら、一生、基督の恵みに感謝した、とだけ言ってください」という周知の言葉を最後に息を引き取ったのも石川の家である。一二日の葬儀も石川の家で行なわれた。だから、石川が司式を担当し、賤子の棺を担ぎ、染井の墓地に埋める際にもその担ぎ手が石川であった——青柳有美もそうであった——のも不思議ではないが、石川が明治女学校で如何に信頼され重視されていたかということはこちらからも推測できよう。

石川角次郎は、聖学院関係者を別にすれば、それほど世に知られていないのかも知れない。しかし、明治女学校

の人間関係を辿り始めてみると、彼は二〇年代から三〇年代にかけて文学とキリスト教に関わる人々の間で極めて重要な働きをしていることが分かり、改めて驚かされるのである。

例えば、相馬黒光が押川方義の紹介で入学した横浜のフェリス女学校を辞めて憧れの明治女学校に入学したのは明治二八年九月であり、丁度このときから青柳有美が明治女学校で教え始めているが、この青柳有美を明治女学校に紹介して教壇に立たせたのが実は石川角次郎である。

『黙移』には「(明治女学校の) 雰囲気は素晴らしいものでございました。けれども『文学界』はもう下火になっていましたし、透谷は死に、藤村さんは昔日の意気なく、天知先生もまた笹目ヶ谷にこもり勝ちで……何となく全盛期は済んだ感じ……そこへ青柳先生が同志社を出てその年に入って来られて羽織なし木綿袴の書生姿で教壇に立ち、『石炭がら』でたよりなかつた藤村先生に代って英文学を担当され、その清新な感情で大いに私共を刺激し、ここにまた明治女学校の第二期全盛が現出された……清純で潔白で、人生に対して熱誠溢るるばかりであった若き日の青柳先生……明治女学校の英文学の時間が青柳先生のその大いなる純朴と誠実で、にわかには非常な充実を示したことは私共にとり何にもかえ難いよろこびでしたが……」とあって、女学生たちに支持されたようすが生き生きと書かれている。(青柳は——いまでは宝塚歌劇団の育ての親として知られる程度かも知れないが——明治女学校で教師をしながら『女学雑誌』の実質的な編集責任者を務め癖のある記事を多く書いて注目され、またデイサイブルス派でも大きな仕事をした人である)。

再び秋山の『基督教会(デイサイブルス)史』から摘記してこの間の事情を確認しておこう。青柳有美(本名・猛)は明治六年秋田生まれ。二〇年九月から二二年九月までスミスが経営していた秋田英和学校で友人川井運吉と共に学び、ミス・ハリソンのバイブルクラスにも通った。二〇年にはガルスト(明治一六年一〇月来日。翌年から

スミス夫妻と共に秋田の開拓伝道に当たったデイサイプルス派の人で「単税太郎」の名前でも知られる。三二年一月二八日召天。因みに、聖学院大学の研究棟一階のホールは「ガルスストホール」と名付けられ、彼のレリーフと最後の言葉「my life is my message」を刻したプレートが掛かっている。から洗礼を受ける。その後同志社に進んで二七年に卒業し、郷里の秋田に戻ったのだが適当な仕事を得られずぶらぶらしていたという。そこで石川が友人・川井運吉を通じて明治女学校に連れて来て英語と倫理を担当させたのである。既に述べたように、彼は教師をしながら『女学雑誌』の編集をしている。三〇年末に関口教会が混乱したときには牧師代理を務めてガイ博士や石川を助け、三四年に川井が渡米したときには毎月一回足利教会に通って助けたという。途中で秋田中学や大館中学の教師になったこともあるが、明治女学校では廃校直前まで教えた。その後新聞記者や雑誌の主幹などを経て昭和一二年から二〇年に死ぬまで宝塚音楽歌劇学校監を務めた。

なお、青柳有美が巖本の世話で明治三年に結婚した相手が久保はるよである。久保は明治六年仙台の近く薄谷の生まれ。一六歳で上京して明治女学校で学んだが、休暇中は帰郷して仙台の教会を手伝った——このとき彼女が話してくれた明治女学校のことを聞いてアンビシヤスガール・星良は明治女学校を憧憬するようになったという。——。二六年に普通科、二八年に高等科を卒業して、『女学雑誌』の事務を手伝っていたのである。

青柳有美の友人・川井運吉にも触れなければならない。なぜなら、彼は——これも石川が世話したのだといわれるが——黒光にとっては仙台の宮城女学校以来の親友・小平小雪と明治二九年四月に結婚しているからである。川井は、明治一七年一〇月ガルスストによって洗礼を受け、青柳と共に秋田英和学校で学んだ後、恐らくガルストの世話で渡米してアイオワの学校で学び、牧師資格も取って二四年に帰国する（その後明治学院で学んでいる）。彼は小平小雪との結婚後直ちに石川の郷里足利で英語学校を開き伝道活動をした（三一年四月の第九回下野基督教信

徒懇親会は、川井が中心的な働きをして巖本善治や青柳、高木信吉、ガルスト夫人その他の人々も出席している。しかし、川井は、三四年二月に萩原守衛（礫山）に洗礼を施し、萩原が渡米するときには同行している——彼の渡米は基督教新聞発行計画による資金集めが目的であったが、うまくいかなかったらしい。約一年後に帰国して青柳のいる明治女学校の教員になる——。川井の妻となった小平小雪は、先に述べたように黒光の仙台宮城女学校時代からの親友である。例のストライキ騒動で斉藤冬などと共に宮城女学校を退学して押川方義の世話で明治女学校に進んだのだが、中退してガイ博士夫人の経営する第六天小学校で夫人のヘルパーとして教師をしていたときに石川によって川井を紹介されたのである。

黒光は『黙移』の中で「小雪さんは、対社会的というか実際的というか……すぐ眼の前から手をつけるという風で……キリスト教にぐんぐん深入りし、一身をそこに捧げるようになったのは植村正久先生の人格に全く傾倒し、そこに自分自身と一致する道を発見したからでありましょう……基督教徒としての信念を固め、その後境遇は浮き世の波に揉まれ……他の同窓に見るような華々しい機運は、なかなか恵まれませんでしたが、信仰だけは少しも変わらず、いまは利根川上流の稲戸井という村に住んで、御主人が村長で、その村を神による理想の村にするといつて……手足は尊い労働によってひびあかざれに荒れていますが、相変わらず颯爽たるものがあり、若き日に寸分違わぬ小雪さんを見るのが出来るのは実によるこばしいことであります」と特に感慨を込めて語っている。

（因みに、これは後のことだが、黒光は自分の子供は信頼できるキリスト教学校に入りたいと真剣に考えて長女・俊子と次女・千香子を女子聖学院に入れたのだと言っているが、黒光が娘たちの学校を選ぶについては石川角次郎をめぐるこういう具体的な人間関係があつたのことと思われる。）

*

萩原守衛が彼に洗礼を授けた川井運吉に伴われる形で明治三四年三月に渡米したのは絵の勉強のためであるが、ニューヨークの美術学校で学んでいた彼がフランスに渡りロダンの彫刻「考える人」に衝撃を受けて彫刻に転向したことはよく知られている。その彼は明治四一年三月に帰国した。新宿西口——いまの安田生命ビルのある場所——にアトリエ「オブリヴィオン」なる小屋を建てた守衛は連日のように中村屋に通う。彼は帰国直後に安曇野で相馬愛蔵が妻・黒光を裏切り不倫の罪を犯していることを知って尊敬する先輩に失望する反面で、黒光に同情する自分の気持ちがいつしか黒光を慕う恋心に変わっていくことに苦しんでいる。そのころニューヨーク以来の友達でパリにいる高村光太郎宛の手紙に「愛兄、其後の失礼を許せ。我心に病を得て甚だ重し。京、奈の地に遊び、湘南の浪に狂へる胸を洗ふこと数回、未だ癒えず……」とあるのは彼の黒光に対する恋の苦痛を吐露したものであり、この苦しみが「文覚像」になった——守衛に文覚のことを語り、鎌倉の成就院に同行して文覚を見せたのは黒光である。黒光は星野天知などが書いた『文学界』の記事を読んでいたからである。なお、彼女がいう「青春の道場」明治女学校の教師たち、例えば天知を初め北村透谷や島崎藤村なども『文学界』で盛んに文覚を論じている——というのも周知のことである。

守衛の最後の作品は「女」である。彼はロダンとカミュ・クロデルのことを知っており、特にクロデルの「嘆願」を見ていた。また彼は、夫・愛蔵の裏切りに失望し自分を慕う守衛に惹かれる黒光の苦しみも知っていた。守衛の遺作「女」がそうした黒光の苦悩をモチーフにしたものだというのもよくいわれる。クロデルの作品が恋する男（ロダン）の前で膝を折り、愛を求めて懇願するように前方に両手を広げて差し出している女の像であるのに対して、守衛の「女」は顔を前方上に向け、たくましく豊満な胸を前に突き出すようにしながら両手は後ろに組んでいる。あたかも習慣や制度的規範など後ろ下方にまとわりつくものを引き剥がそうと高く前方にある自由の

在処に向かつて踏み出そうとする意志が緊張した筋肉を作っているような女の像である。「Love is art, struggle is beauty.」という彼の有名な言葉を具現する像といえよう。黒光の子供たちはこれを初めて見せられたとき「お母ちゃんだ!」と叫んだというが、うべなるかなと思われる。

守衛はこの彫刻を完成した直後、相馬夫妻が店の裏に柳敬助のために作ったアトリエの出来具合を見に来て中村屋の茶の間で倒れ、大量の血を吐いて二日後に召天する。守衛の友人で帰国後奈良地方を訪ねていた高村光太郎は訃報を聞いて急いで戻り、安曇野に向かう守衛の遺体の後を追う。柳敬助も房州から桜の花を折って来て守衛のアトリエ・オブリヴィオンに撒いたという——因みに、信州穂高に作られた「礫山美術館」は柳敬助の意匠になるもので、「女」はここに国の重要文化財として収められている。またもう一つ付言すれば、柳敬助と高村光太郎を結びつける役割をしたのは守衛であるが、後に柳敬助夫人が長沼智恵子を光太郎に紹介したことから「智恵子抄」の世界が始まる。光太郎と智恵子の関係はロダンとカミュ・クロデルの関係と似ている。夫の芸術がどんどん進(深)化するのに対して家事で時間を取られ、自分はどんどん取り残されていくとの不安が智恵子とクロデルの頭を狂わせる原因の一つだといってもよいからだ——。

守衛の死によって黒光は魂が抜けたように元気がなくなる。さらに、守衛が黒光を恋し苦しんでいることを知っていた高村光太郎が(彼は守衛に対する黒光の蠱惑的な振る舞いを嫌っていたので帰国した後中村屋に顔を出さないようにしていたが)、守衛を死に至らしめたのは黒光だとして激しく非難した。もちろん、光太郎の非難は一面の真実を衝いていたから黒光は長く苦しんで体調を崩し、寝込むようになっていた。このような黒光を慰めようとして木下尚江が訪ねて来る。彼は「あなたにもあんなしおらしいところがあるとは思わなんだ」といいながら、彼女に岡田式静坐法を勧める。——少し後だが、黒光は井口喜源治に宛てた四四年四月の手紙に「疲れて疲れて丁

度骨を抜き去られた様に力がなくて、グタリとしてねて計り居るのです」と書いている。

*

萩原守衛が柳敬助のために中村屋の敷地に作ったアトリエの完成を見に来た晩に血を吐いたことは先に述べたが、柳が結婚して去った後にこのアトリエに住み込んだのは中村ツネである。相馬夫妻の長女・俊子は、両親が東京に去った後も長く安曇野に留められたままであったけれども、中村ツネがこのアトリエを使い始める少し前から両親に引き取られた。黒光が自分の娘は東京の信頼できるキリスト教女学校に入りたいと望んでいたから、俊子は女子聖学院に入学して寄宿舎には入り、週末の金曜日に帰って両親のところまで暮らすという生活を始めていた。

中村ツネは一五歳の俊子をモデルにして描くことに執念を燃やすようになる。安曇野の地主相馬安兵衛——愛蔵の兄——夫婦に子供がなかったので、彼らに溺愛されて育った俊子は人に言われれば素直に従うところがあつたらしく、都会生活に慣れない苦しさを勞ってくれる中村ツネの優しさに報いるべく、彼の希望を受け入れてモデルになった。その「少女裸像」が大正三年三月二〇日から東京大正博覧会美術展覧会に出品されることになっていく。女子聖学院では大変な話題。生徒も教師も全員揃って見に行くことにしていたが、ミス・クロソンは開幕の前日に下見に行った。清楚な少女像を期待していた院長の予想に反して、その絵は——今日の我々が見ても——ルノアールの豊かな裸婦像と見まがうほどの堂々たる裸体画である。ミス・クロソンが驚いたのも無理はない。彼女は主催者に撤去を申し入れる。しかし抗議は受け容れられず、この絵は七月三十一日の閉幕まで展示されて大好評であつたという。

俊子は女子聖学院で懲罰されることもなくこのことは済んだのだが、引き続き今度は着衣の俊子をモデルに描く中村ツネは彼女を愛し始め、ついには一七歳の俊子に脅迫的に結婚を求めようになる。色彩の魔術師といわれた

中村は、既に新進の有望な画家として評価されてはいたが、重度の肺結核を病んでおり黒光は俊子の結婚相手としては最初から考えていなかった。中村は友人たちに俊子との相愛を吹聴したが、俊子も中村を愛しているわけでもなく、未だ彼女には結婚の実感もない。中村の一方的な思いこみであることが分かったので、相馬夫妻は中村の申し込みを激しく拒み、俊子を暫くの間隠すことにしたという。

この間の経緯を『黙移』では「今まで親子の間柄のようであつたのに、急に喧嘩腰の調子で、俊子を自分に許せと、初めから終わりまで非常識の限りを書いてあるのです。闇から棒にこう言われて私共はただ呆然として返事の書きようがありません……ところが夕方、娘から『散歩に出かけましょう』と私を誘いまして日比谷公園に行きますと……娘は声をひそめてこう囁くのです。『実は今夜九時頃家出をしろとツネさんからすすめられているのですが、私はどうしてもお母さんに黙って家を出る気にはなれませんし、またそんな事が誰にも幸福ではないと思うのですが、ツネさんは狂人のように荒つぽくなっているから、どんな事を仕出すかも知れないし、どうしたらいいでしょう。』……『勿論家から出るようなことはしません』ときっぱり申しました。『もう泣くことはない、母さんに任せなさい、でもお前はよく打明けてくれたね』……その晩車に乗せて父親が付添い、桂井さん（そのころ中村屋に出入りした早稲田の助教授）の家にまいり、当分預かってもらうことに致しました……一方ツネさんは夫を殺すといつて長い日本刀を振り回したり、悪口雑言を書いてよこしたり、全く正気の沙汰ではありませんでした。要するにツネさんは俊子を我々両親が圧迫してよこさないのだ、病人で貧乏だから自分にくれないのだと、こう僻んでいたのでした。……相談の上、ツネさんと俊子を改めて会見させました。俊子はそこで明白に自分の自由意志によることを説明したのですが……これがきつかけとなり、次第に諦めるようになりまして……狂暴な行動に走つたことを真実慚愧して謙虚な詫びの手紙をよこしました時は……今更のようにこの人を可愛しく思い……」と書い

ている。

俊子は女子聖学院を卒業してから更に女子学院に進む。一方、相馬夫妻はインド独立運動家で英国政府の追求を逃れて日本に潜んでいたボースら二人を店の裏（前に中村ツネが使っていたアトリエ）に匿う。これは玄洋社の頭山満などに頼まれてのことだが、『黙移』では「諺にも窮鳥懐に入れば獵師もこれを殺さずといいますが、英国は世界大戦を機会にこの印度の志士に独探（英国に対するドイツのスパイの意味）という汚名を被せて、日本から追出させようと迫るのです。日本はそれが分かっているながら、みすみす殺そうとして待ち構えている者の手に引渡さねばならぬとは何という恥しいことだ」と書いている。このことについて黒光は確かに人道的に反応し、書かれていることに嘘はないのだろうが、頭山たちの意図は日本の勢力拡大のためにアジアから英国を排除するということであつたのだから——いかに黒光らしいとはいえ——それほど単純な問題ではないはずである。まして、その後女子学院を卒業して英語を駆使できる俊子がボースを助けるために結婚させられるに至る事態を見ると考えさせられるものがある——。

ところで、わたくしは学生たちと一緒に中村屋に行く。レストランでは名物インドカレー（値段は比較的安い）を注文させる——やや強制だが、わたくしの奢りなのだから他のものは駄目という調子——。このカレーは中村屋独自のもので、骨付き鶏肉を使っているから現今ではヘルシーだとして評判を呼んでいるが、起源はボースたちを匿ったときカレーは欲しがるが牛肉を食べない彼らのために工夫して作ったことにあるのだからおもしろい。わたくしが学生たちを連れて行くのは、こういうことを話しながら、彼らを歴史や文学の世界に誘い込もうという魂胆があるからである。

*

連想はとめどもなく広がる。「黙移」を読んでいると、ここに書いたようなことその他に、木村熊二夫人・鏡子を
中心とした下谷教会婦人会から始まる明治女学校と婦人矯風会との関係、黒光の姉・蓮の婚約破棄に関わる矯風会
会頭・矢島樺子と書記・佐々城豊寿とのこと、北村透谷など『文学界』の連中の明治女学校での働き、黒光と木下
尚江のこと、石川角次郎と宮崎湖処子（民友社系の詩人また小説家として知られているが、彼は明治十九年牛込払
方町教会で洗礼を受けていた。高木信吉の紹介で石川やガイ博士を知り、三一年四月に改めてガイ博士から全浸礼
を受ける。ディサイプルス派の機関誌『聖書之光』の創刊に加わり、聖学院神学校設立の際には教授に迎えられた
が、網島梁川の「見神の実験」に呼応する見神の業を主張するようになり、三八年八月に辞職している）のこと、
或いは佐々城信子の——『或る女』の葉子を理解するには、いわば不倫の子として生まれた信子の感性と仙台時
代から才気煥発な美人として知られた豊寿の血を引き継いでいることなどをもう一度点検する必要があるのではな
いかというような——こと、小諸義塾の教師になった島崎藤村の最初の小説『旧主人』に描かれる木村熊二の再
婚者・東儀隆子のことなど、実に多くの糸口がみつかる。また、藤村の『春』や白井吉見の『安曇野』、野上弥生
子の『森』などを読み返す楽しみも倍加する……。

だが、ここでそれらを手繰り始めると余りにも長くなりそうだ。稿を改めて扱うことにしよう。

補記①本分中に扱った人々の名前には敬称を付けなかった。

②中村ツネの「ツネ」は特殊文字でわたくしのPC文字パレットにはいつていないので、ここでは仮に「ツネ」とした。

③本文中に示したものの他に『仙台東一番丁教会史』や藤田美実『明治女学校の世界』、宇佐美承『新宿中村屋 相馬黒光』などを参考にした。